

生きる

第5部 私たちの未来

社会に出ると、理想と現実のギャップに悩む。就職活動を控える学生は、そんな不安と緊張を抱えながら、その一歩を踏み出そうとしている。

階上町の高橋祐賢さん(18)は八戸工業大に通う3年生。学んだことをどう生かすか、首都圏に活躍の場を求めるのか、地元での生活を選ぶべきか。自問を繰り返して、答えを導こうとがいている。

「本当に自分がやりたいことは何なのか」。今はまだ見えない。

10代の頃は「新しいことに挑戦するのが好きだった」。積極的に未知の領域に飛び込むことは、楽しみでもあ

② 模索

自分に合った仕事とは



イベントの準備を進める高橋祐賢さん。アート活動に関わりながら、将来を模索する日々が続く＝11月、階上町

就活目前、自問する日々

り、自分が成長する糧でもあった。高校に進学する際は、ライフル射撃をやってみたいとの理由から、島根県内の学校へ。部活動で腕を磨き、全国大会にも出場した。

大学進学を機に地元に戻り、選んだのは感性デザイン学部。関わりを持つことがなかった分野だったが、アートの街にもたらず効果に可能性を感じた。授業が終わると、自ら立ち上げた競技射撃愛好会で活動。アルパ

に励み、友人との旅行や飲み会も良い思い出だ。

絵に描いたようなキャンパスライフも残りわずか。いよいよ人生の岐路が迫っている。

3月には、企業の説明会が始まる。「焦りはない」と言うが、高校時代の同級生は、既に就職活動に向けて動き始めている。

11月に階上町の魅力写真やイラストで表現するプロジェクトに参加した。町内各地にアート作品を展示。ふるさとを発信する一大イベントだ。

山奥にまで足を運んだ。新しい発見に心が躍った。展示会場の道の駅はしかも準備を進めながら、自らの夢を重ねた10年後を想像してみる。30代でマイホームを建てて、土日の休みを利用して射撃場に通う…。

「地元での暮らしにも愛着を持つようになった。豊かな自然がある。大好きな新鮮な刺し身を存分に満喫できる。一度ふるさとを離れたからこそ、ありふれたものがぜいたくで、貴重であることに気付いた。」

しかし、前提であるはずの「自分に合った仕事」が明確に浮かんでこない。もう少し時間がかりそうだ。

「取りあえず、目の前のことを一つずつこなしていかないと」。作業のペースが少し上がった。